

豊州女学校の変遷と再生

— 小野由之丞・今村孝次・佐藤義詮 3人の先覚者たちの協力 —

仲 嶺 真 信

【要 旨】

別府大学の源流を遡る上で豊州女学校の存在意義は極めて重要である。夙に佐藤義詮先生は「豊州女学校跡石碑」に歴史的事実と歴史的記述の齟齬を見出していた。これを補正・補完するために筆者は、豊州女学校の歴史的変遷を示す諸史料を渉猟し、厳格な検証を行った。即ち、豊州女学校（小野由之丞創設）の後継は、巖常園を経て、今村孝次・佐藤義詮に至る系統であり、その変遷と再生の波を乗り越えて、別府大学の源流となったことを証明した。

【キーワード】

豊州女学校 小野由之丞 今村孝次 佐藤義詮 別府大学の源流

はじめに

かつて佐藤義詮先生（以下佐藤と略す）は、豊州女学校の歴史的変遷に言及している。即ち、大分市金池町に建立された「豊州女学校跡石碑」について、歴史的事実と歴史的記述が相違していると指摘している。故に筆者は本稿において、豊州女学校廃校後の後継となった昭和女学院・昭和実践女学校・豊州女学校・豊州高等女学校という一連の系譜を辿りながら、主にそれぞれの時期の経営者（校主・校長）の研究及び社会教育上の活動等に注目して考察を行う。ちなみに、佐藤が指摘したのは、以下の事柄についてである。

「大分市金池の陸橋の下に『豊州女学校跡』という黒みかげの碑が建っている（図1-①・図1-②）。裏面を読むと、ここにあった豊州女学校が廃止というか、なくなった日付まで明示されていたように思う。小野由之丞先生が明治41年に開校した同校は、いろんないきさつを経て、昭和12年に再び小野先生を校長に迎え終戦後まで存続し、さらに名称を変更して今日の別府大学の源流をなしている。私が自分の学校のことを語るの（略）、歴史的事実と歴史的記述がかくも違っているという例を示したいことと、もう一つ私立学校の本県に及ぼした公の記録が極めて少ないことである。教育史とは公立学校の歴史ではなく、県民に対する教育の歴史でなくてはならない（略）」。

（注1 以下漢数字は算用数字へ改め、下線は全て筆者加筆）。

以下、順を追って内容を検討しよう。まず「豊州女学校跡」碑文の内容を紹介し分析する。

1. 「豊州女学校跡石碑」について

(1) 碑文の内容

所在：大分市顕徳町1丁目1-23 ローソン大分顕徳町店前

正面（図1-①）「豊州女学校跡」銘のみ、以下に背面の碑文（図1-②）を紹介する。



図1-① 豊州女学校跡 石碑表



図1-② 豊州女学校跡 石碑裏

「私立豊州女学校は大分県教育界に貢献した小野由之丞翁（1873-1950）が大分県における女子中等教育の不十分な実状を憂えて明治41（1908）年創設した。県下各地から多くの女子が校内の寄宿舍で寝食を共にしながら勉学に励み、卒業しては主婦として、また小学校等では教育にたずさわり、さらに県立女子師範学校に進学するなどして県下教育の進展を促した。その後は県立の女子教育機関が各地に設立され所期の目的は達せられたので、昭和2（1927）年に廃校した。この地に校舎のあった期間は25年巣立った卒業生は三千人に及んだ。昭和47（1972）年校舎跡が国道十号線改良工事で道路敷きとなったため、卒業生関係者相い謀り碑を建てて同校を記念しあわせて小野由之丞翁の功績を顕彰することとした。

昭和48（1973）年5月吉日 小野順三 拜書 』

（和年号は元々漢数字、筆者が括弧内文字に算用数字を挿入し、下線と共に加筆。注2）

上記の碑文の内容からは、次の6つの事実が判明する。

- ①豊州女学校創設者：小野由之丞
- ②創設年：明治41（1908）年
- ③廃校年：昭和2（1927）年
- ④当初地校舎の存続：25年間（1911-1936）
- ⑤石碑建立の理由と意義：卒業関係者の記念及び設立者・小野由之丞の功績を顕彰
- ⑥建立年：昭和48（1973）年・小野順三拜書

(2) 問題の所在と分析

以下に佐藤が指摘した碑文の問題点を整理して示す。

「昭和2年廃校」という事実には問題はないが、豊州女学校の辿った歴史の変遷を実証的に再検討すれば、碑文の内容は、歴史的事実と歴史的記述において明白な齟齬がある。齟齬は佐藤の指摘を次の通り補足（括弧内文言）すれば解決する。即ち「いろいろないきさつ（昭和女学院・昭和实践女学院）を経て、昭和12年^{（注3）}に再び小野先生を校長に迎え終戦後（財団法人・豊州高等女学校として昭和26年）まで存続し、さらに名称を変更（昭和26年2月27日以降、学校法人・佐藤学園）して今日の別府大学（学校法人・別府大学）の源流をなしている」と修正できる。この見解は、別府大学の源流を遡る上

で、極めて重大であり、豊州女学校継承者としての矜持と自信を示している。本稿において筆者は、この源流の実相について順序立てて言及したい。

ところで、豊州女学校創設者・小野由之丞(以下小野と略す)とは、どのような人物であったのか、当時の資料に基づき詳述しよう。

2. 小野由之丞及び豊州女学校について

小俣愨『大分人名辞書』(大正6)によると、小野は以下の通りである。要約すれば「小学校教員を養成する『大分県尋常師範学校』を明治27年(21歳:筆者加筆)に卒業し、その後現在の教諭職に当たる『訓導』、校長職を大分県内で歴任し、最後に大分県立高等女学校(明治34-40:筆者加筆)を勤め終え、明治41年(35歳:筆者加筆)独力で豊州女学校を創立した。学校は実践主義を掲げ、志操堅実の子女を養成し、その校風は際立っている。創設者小野由之丞は、社界教育(ママ^{注4} 社会教育)に全力を尽くし、多くの講演活動を行っている。豊かな思想と熱心な語りは、比類が無く、飾らない人柄、潔い品性をもつ典型的な教育家である」(^{注5}丸数字、算用数字、下線は筆者加筆)。

以下、明治期における小野及び豊州女学校の様子について順を追って細見して見よう。豊州女学校の学科の構成・内容をはじめ納付金・始業等については、以下の通り。『大分県教育雑誌 第277号』(明治41年)によると「①本科(3ヶ年)研究科(1ヶ年)を置く。②本科は学科課程・入学者資格共高等女学校本科に同じ。③研究科は高等女学校本科又は技藝科卒業生若くはこれと同等のもの。④授業料 本科 1円、研究科 1円20銭 ⑤入学金 1円 ⑥学資寄宿生は1ヶ月おおよそ6円50銭 監督嚴重なる寄宿舎 ⑦始業 明治41年4月12日(日曜日) ⑧事務所 大分荷揚町78番地」と記す(^{注6})。

なお同史料から、当時の豊州女学校の役割は次のように考えられていたことが分かる。要約すれば「当時の高等女学校入学志願者は、募集人員に対し数倍も多く、2, 3回志望しても撰から外れ、不遇を嘆く者が多々いたので、その救済の方法として、師範同窓会員の中堅小野由之丞が豊州女学校を創設した。県下女子教育の為に貢献する所が多いことは疑いない」と言う(^{注7} 下線と強調は筆者、以下同様)。実際、明治41年4月末の実績を見ると「(略)目下百貳拾余名の生徒これあり、前途頗る有望の様子に候。(略)」(^{注8})とある。

『教育雑誌 第279号』によれば、入学者が多く、附近寺院二ヶ所を借用するほど盛況であり、精神の鍛えられた生徒は極めて優秀であったことが分かる。即ち「小野由之丞氏創設の豊州女学校も各位の御援助により入学志願者頗る多く仮校舎は狭隘を告げ附近寺院二ヶ所を借り入れ授業致居り候由殊に研究科の如き十名内外の予定に候処二十数名に及び実科としては裁縫を主として刺繍造花編物細工物等各専門の教師によりて教授せられ生徒は心力の鍛錬を経たるものとみなれば其の進捗殊の外著しき由に御座候」(^{注9})。附近寺院二ヶ所は、『佐藤学園の八十年』によれば「寂靜寺及び光西寺の二寺」を指す(^{注10})。他方『大分市教育史』によれば、この二ヶ所は、寺院とは明記しないが、「於北町の普通住宅を仮校舎とした」とも記す(^{注11})。

明治41年10月には、盛況による生徒増加に伴い、教室が狭くなったので、新たに1学級を編制、担当者を増員し、さらに教員検定試験及び高等女学校・女子師範学校入学試験準備対応を始めている(^{注12})。同年上記下線部試験準備対応の広告を『大分県教育雑誌 第284号』に次のように掲載している。

「講習生募集

准教員試験準備 目的 尋常小学校准教員検定試験準備

学科 修身 教育 国語 算術 理科

期日 来十一月一日より凡一ヶ月間毎日午後三時より五時まで
 講習料 五拾銭^(注13)
 申込 随時
 高等女学校女子師範学校 入学試験準備
 学科 国語（読講、作文、習字） 来十一月一日より来年三月下旬まで
 毎日午後三時より五時まで
 月謝 1ヶ月四拾銭入学科を要せず
 申込 十一月二十五日まで
 大分町外堀 私立 豊州女学校 ^(注14)

明治43年の豊州女学校の状況を『大分県教育雑誌 第309号』の記事を要約してみると、創立年に生徒数120余名だったのが、「158名へと増えている。しかも次年度から高等女学校入学予科を開始予定であり、生徒数の増加に合わせて敷地を購入し新築の計画があることが分かる。元々修業年限三ヶ年ではあるが、教授時数を増加し、四ヶ年程度のもをすべて修了させる予定であり、また一ヶ年の研究科を設置する」^(注15)。

その後大分第一尋高小学校（大分第一尋常高等小学校）の西南に移転・新築した豊州女学校（図2：地図）の明治44年の状況を要約すれば以下の通りである。

「場所：上野町中央、校舎：2階建（建坪110

余坪）新築、内訳：普通教室3、技芸教室1、職員室1、寄宿生室3、舎監事務室1、舎監控室1、食堂1、整容室（化粧室）1、炊事場1、浴室洗面室1、トイレ・校長住宅等で構成。アクセス：外濠より徒歩2丁余、環境：田園に囲まれ水も空気も眺望もよい。生徒150余名、内寄宿生44名、女教員は全て寄宿舎に住み一大家族をなしている」^(注16)。

即ち、所在地上野町中央は、大分府内城外堀通りから南へ約218m程離れた位置にあり、設備の整った2階建校舎の中で寄宿生と校長・女教員等が共同生活していたことが分かる。

ちなみに、小野は大正7年の記事において、学費・諸経費及び教育方針等について、次の通り述べている。即ち「学費の内訳をして見ると毎月授業料が一円五十銭校友会費一円、舎費、筆、紙、墨、文具共に約五十銭、食費である然し四円五十銭日用品、雑費が卅銭宛位。（略）四円ほどの書籍代もかて平均十円もあつたら充分。（略）私は本科の三年で充分頭脳を造るべく努力して居り（略）、実科は左様大切なものではなく頭脳の出来て居る根底のある者は何時でもその位の事は出来得る（略）。高等女学校等と學術の点に於いて比較しても左程遜色はありません」と女学校の実情と抱負を語っている^(注17)。

さらに大正13年現在の豊州女学校の様子を記す内容は以下の通りである。

『大分県教育五十年史』によると「私立豊州女学校 イ、沿革 本校は明治41年4月大分町1252番地に開校し全5月（ママ 実際は明治44年）場所を全町字金池に変更して校舎新築に着手し全9月より新校舎にて授業開始した。高等女女（ママ）学校の課程の外高等女学校、女子師範学校の入

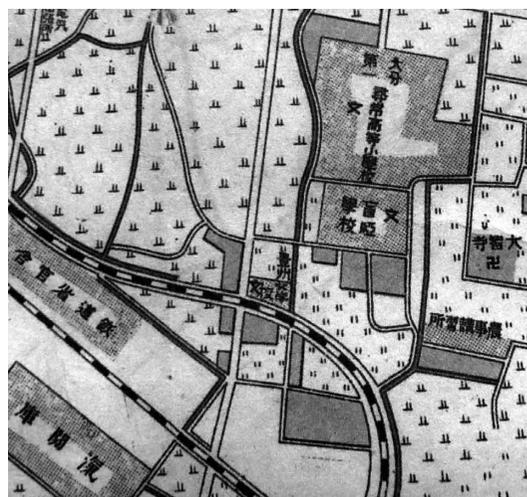


図2 豊州女学校(大分町上野町 図中央)大正10年

学応募者、教員検定試験応募者等を養成すると同時に研究科において主として実地的教科を修めしめる。口、現在の状況 編制 4学級 生徒数 138人 職員数6 校地敷地 404坪 総建坪数 105坪 運動場 158坪 主要なる建物 二階建、平家各1棟 普通教室3 技芸教室1 職員室器具室1 舎監事務室1 舎監控室1 寄宿生室3 食堂1 整容室1 炊婦室1 炊事場浴室盥漱室、生徒昇降所、便所及び校長住宅 ハ、卒業生の状況 総数845人 内訳 家庭に入りし者 548人 教員其の他の職業に従事する者 92人 其の他 205人 ニ、歴代校長 1代 氏名 小野由之丞 就職年月日 明治41年4月 引き続き現在に至る^(注18)。即ち当時「生徒数138人、卒業生の状況として総数845人、その内訳は、家庭に入りし者548人、教員其の他の職業に従事する者92人」となっている。ちなみに明治43（1910）年の生徒数158名から見れば、大正13（1924）年のそれは、138人で20名減となっている。

3. 小野の社会教育活動及び豊州女学校廃校以降について

(1) 大正期における小野の社会教育活動

1) 通俗教育（社会教育）活動^(注19)

- ①大正2年9月27日、(場所) 速見郡豊岡尋常小学校、(講師) 豊州女学校長小野由之丞、同郡教育会長の申出によるもので大分県教育会から派遣^(注20)。
- ②大正2年9月29日、(場所) 大分市駄の原浄土寺、講演 小野由之丞、聴衆約350人に多大の感動を与えた^(注21)
- ③大分県教育会(本会年次30) 総会(大正3年6月6日)にて教育功績者として表彰^(注22)。
- ④大分県及び大分市教育会代議員：①大正3年(県教育会代議員) ②大正5年(市教育会代議員) / 大正7年(市教育会代議員) / 大正9年(市教育会代議員) / 大正13年(市教育会代議員) / 大正15年(市教育会代議員)^(注23)
- ⑤大正5年6月11日：大分市教員会の講習会講師として、豊州女学校長小野由之丞が「通俗教育ニツイテ」の題で講演を実施^(注24)
- ⑥大正6年6月9日(総会)において大分市青年团组织答申案作成委員就任^(注25)
- ⑦大正8年9月27日：大分県教育会(本会)評議委員に就任^(注26)
- ⑧大正12年5月16日：「国民精神作興ニ関スル詔書」の御趣旨を徹底せしむる為社会教育上最緊切なる方法の調査委員及び起草委員に就任^(注27)
- ⑨昭和5（1930）年2月5日：大分県教育会、代議員に就任^(注28)

2) 図書館活動

- ①大正8年11月14日：日本図書館協会第5回九州支部総会(福沢記念図書館)にて講演^(注29)

以上のことから大正期の小野は、一私学設立者であると同時に、大分県教育界における重鎮をなし、豊州女学校内外でも社会教育活動を盛んに行っていたことが分かる。

(2) 豊州女学校廃校(昭和2年)後の昭和女学院(昭和实践女学院)時代について

1) 豊州女学校廃校後の後継校としての変遷(別府女学院設立以前)

『大分市教育史』(昭和4年)は、豊州女学校について次のように記す。

「本校は現在昭和女学院となつてゐるもので明治41年4月、小野由之丞氏の創立したものである。最初は大分市於北町の普通住宅を仮校舎として開校したが後44年4月、金池に校舎(二

階建百坪)を新築して移転したのである。開校当初から本科及研究科を置いて女子の一般的修学並に高等女学校入学の準備や小学校教員検定試験受験準備等に尽力した。後には芸芸専修科をも置いて一層学習の便を図つてみたが、昭和2年1月26日限り廃校し、校地校舎を其の儘昭和女学院へ譲つたのである」^(注30)。

ちなみに小野自身が発行兼編集人となった『創立五十年記念誌』によると、廃校後の昭和2年6月小野は、大分県師範学校同窓会理事長を務めており、当時の大分県教育界において、なおも重職を務めていることが分かる^(注31)。

『佐藤学園の八十年』によれば「豊州女学校は、設立3年後の44(1911)年に生徒数164人まで増大したが、以後漸減して、大正8(1919)年にはわずか70人、大正10(1921)年には77人と減少、結局、昭和2(1927)年1月26日限りで廃校^(注32)となり、校地校舎・生徒はともに、校名を改称した『昭和女学院』に受け継がれ、学則も改めている」^(注33)。

豊州女学校の校名を昭和女学院と改称して再生した学校経営者は、佐伯の西教寺の常巖圓という僧侶であった。『大分市教育史』によると、私立昭和女学院について次の通り記している。

即ち「本院は昭和2年1月26日、元私立豊州女学校の校地、校舎、生徒を継承して生れ、全年4月第1回新入生を加へ、巖常圓を院長として開院したものである。本院設立の趣旨は(略)家政の實際に當つて現代の教育に大なる欠陥あるを(略)補はわんとする勇猛心に立脚致し(略)人格の涵養を中心とし学科の實力と実践に徹底せしむる目的(略)を果さんと致すのであります」

^(注34) 句点の挿入、漢数字から算用数字への変換は筆者加筆。

上記の通り元豊州女学校の校地・校舎・生徒を継承し、女子教育の目的を高く掲げた学校経営をとったが、この昭和女学院は、次の新たな段階の困難に至る。『佐藤学園の八十年』によれば「昭和3年3月に家政専修科9人、同4年3月に本科9人を送り出しているものの、過渡的な継承で、巖院長も別府駐在の本願寺布教という要職があり、しかも適任者が現れたということで、これを譲り渡すことになったものと思われる。昭和4年3月には、さらに昭和実践女学校と改名し、学則も改め、今村孝次が設立者兼校長として経営を始める」と記している^(注35)。ちなみに、豊州女学校校地校舎を譲られた昭和女学院の昭和4年の状況は『大分市教育史』によれば、次の通りであった。

「一 沿革(略) 二 現在の状況(昭和3年7月現在)学級数 5学級 生徒数 150名(定員250名) 職員数 専任9 嘱託4 卒業生 無し 三 学則抄 豫科(略) 本科(略) 家政専修科(略)」^(注36)

以下、昭和女学院以後、別府女学院以前の継承と再生の経緯について年表風に略述する。

『佐藤学園の八十年』によると「昭和3年4月1日 今村孝次(昭和女学院)校長就任。昭和4年1月16日 昭和実践女学校代表として、今村孝次、学校用地借用契約を結ぶ。同年3月25日 昭和実践女学校と校名を変更し、学則を改める。校長・今村孝次。同年10月21日 今村孝次を昭和実践女学校設立者として認可」したことが分かる^(注37)。この昭和実践女学校は、昭和4年11月3日に旧豊州女学校の跡地を離れ、大分市大字大分字顕徳寺3045の1番の借用地に新校舎を落成している^(注38)。さらに昭和11年10月5日 佐藤義詮が昭和実践女学校設立者として認可され、校主となり、校長には今村孝次就任^(注39)。この設立者交替の経緯について、佐藤はこう述べている。

「昭和7、8年ごろから郷土史(『豊前豊後書誌])の關係で今村先生を訪問することが多くなりました。そのころになると、校舎新築の借金と、土地の借料の支払いには、職員の給与の減額ぐらいでは追いつかない状態になっていた(略)。生徒の数も1年から3年まで合わせてわずか30数人となっていました。(略)学校は自宅の二階にでも移し、残っている生徒を卒業させるまでは続けるより他はない(略)新校舎を建築して開校したばかりで廃校にするに忍びず、今後の経営を引き

受けてくれないかと、私に話をもちかけられた(略)私は特別、学校経営に対する野望とか、欲望とかはあまりありませんでしたが、今村先生とおつき合するうちに、私が引き受けなければならないような状況になってしまった(略)校舎二棟を3000円で買い、それを月賦で償還するということで、(略)昭和11(1936)年夏に契約を終わりました。昭和11年10月5日、私が昭和実践女学校の校主として正式に認可され、学校経営の責任を負うことになりました。校長は、これまでと同じ今村先生(略)」(注40 漢数字は算用数字に改め、下線及び括弧内数字、強調文字も筆者加筆)。以上が、昭和女学院及び昭和実践女校の校主・校長の継承や交替についての経緯である。

ところが、この後以下の様に旧来の校名と人事の復活が見られる。『佐藤学園の八十年』によれば、「昭和13年4月1日 再び豊州女学校と校名変更、校長に小野由之丞就任。昭和14年4月1日 豊州高等女学校と校名変更、大分市城崎町の新校舎に移転、校主・佐藤義詮、校長・小野由之丞。昭和17年4月20日 財団法人豊州高等女学校の設立が認可され、理事長に佐藤義詮就任。昭和19年4月1日 校長に佐藤義詮就任。豊州高等女学校附属幼稚園『ヨイコの家』を開設、園長に小野由之丞就任。昭和21年5月1日 別府女学院を別府市鶴見園に開校」(注41)。以上の事柄から、豊州女学校後継の昭和女学院・昭和実践女学校を経て、復活した小野由之丞と豊州女学校・豊州高等女学校の登場、そしてこの流れが別府女学院へと継承される経緯が読み取れる。即ちこの系統的変遷が、佐藤の言及した別府大学の源流である。

次に学校経営者としての小野及び今村両者の活動に注目してみよう。

2) 豊州女学校廃校後の小野の活動

前記において、大正期の小野の社会教育活動について述べた。ここでは昭和期の小野の教育活動について少し触れてみよう。昭和2年1月26日限りで廃校とした後、しばらく間を置いて昭和13年に再び豊州女学校に復帰するまでの間、小野は、大分県教育会における代議員を務めると同時に、教育会館建設委員として重要な役割を果たし、その功労者表彰を受けている。数々の役職をここに縷述出来ないが、昭和5年以降の役職履歴の詳細については注記に譲る(注42)。前述の通り豊州女学校廃校後の昭和2年6月小野は、大分県師範学校同窓会理事長として『(大分県師範学校)創立五十年記念誌』を編集出版するほどの大分県教育界の重鎮であった(注43)。次に昭和女学院(昭和実践女学校)の後継者・今村孝次について紹介する。

4. 今村孝次の社会教育活動について

ここでは、今村孝次の特に教育・研究者としての側面について述べよう。

(1) 出版・研究活動

- ①昭和6年：『豊後国志附 箋積豊後風土記』(注44)／②昭和10年：佐藤義詮『豊前豊後書誌』の序文(注45)／③昭和12年：「石川康長と『東海美女伝』の主人公大久保長安」2件(注46)／④昭和12年：「明治初期に於ける大分県出身の文士」(注47)／
⑤昭和12年：今村孝次[編・注]『松平親良夫人下国日記』(編集・兼発行人 佐藤義詮)。

この⑤は、江戸村築松平家藩邸を發し、東海道より伊勢路大和路を経て大阪より船に乗り、杵築城に着くまでの紀行文であり、女流文学の少ない大分県においては擬古文の珍しき一資料となるので、昭和実践女学校生徒の課外読本にと思ひ原文を読みやすく改訂し、謄写したことを記している(注48)／

- ⑥昭和18年：『二豊人文志』(序 村上直次郎 後記 佐藤義詮 注49)

(2) 講演等

①昭和8年：「田能村竹田の生涯における一転機」(注49)／②昭和9年：「国学 二豊国学の概観」(注50)／

(3) 研究会

①昭和12年大分史談会：『大分史談 第壹輯』大分史談会会員記念写真掲載(マリオ・マレガも同会員)。昭和12年には佐藤・今村の両者が共に昭和实践女学校勤務の傍ら大分史談会に積極的に参加している(注51)。

ちなみに、今村・マレガ・佐藤の三者は、共に大分史談会所属であった事が分かるので、次にその関連した内容について詳述する。

5. 今村孝次・マリオ・マレガ・佐藤義詮 三者に共通する活動について

大分史談会の活動を通して

まず、マリオ・マレガ(1902-1978 以下マレガと略す。注52)について述べる。マレガは、1929(昭和4)年12月16日宮崎着、宮崎神学院教師。1931(昭和6)年12月に大分教会に移る。1933(昭和8)年海星幼稚園の設立の関わり、1935(昭和10)年4月大分教会の主任となる(注53)。この布教活動以外では、特に大分史談会におけるマレガ神父の活動には瞠目せざるを得ない。

例えば、『大分史談 第壹輯』(昭和12年刊)口絵に大分史談会会員記念写真(昭和12年7月11日第9回・大分史談会 杵原八幡宮参拝にて撮影 注54)があり、その中にマレガ及び今村の姿が見え、マレガと今村が大分史談会会員であったことが分かる。同誌上、今村孝次「郷土の先儒と和歌和文の造詣」(注55)、佐藤義詮「郷土史漫渉」(注56)に続いて、大分カトリック教会 マリオ・マレガ「日本大名に送った羅馬教王の書翰調」(注57)を掲載している。

ところで、大分史談会による昭和12年12月開催の「マレガ博士古事記伊訳完成祝賀会」に注目したい。この昭和12(1937)年7月には日中戦争が始まり、同年11月には日独伊三国防共協定に調印をしている。以後、戦局が極めて険しくなっていく時代である。

祝賀会の様子を要約すれば以下の通り。「昭和12(1937)年12月7日午後4時より『マレガ博士古事記伊訳完成祝賀会』大分市一丸デパート食堂室にて祝賀会挙行。来会者：佐藤義詮、十時英司、日名子太郎、今村孝次、辛島詢士、高山英明、三重野幸男等、各方面多数名士51名。三重野幹事がマレガ博士の紹介を兼ね履歴を満場に披露し、次に来会者の紹介、高山英明の祝辞、マレガ博士の謝辞及び感想談に続き、赤沢伝道士が伊訳『古事記』の概要を述べた後、数名の質疑応答を経て直ちに開宴した。宴酣なる頃今村昭和实践女学校長の主唱にてマレガ師の為め一同乾杯。この様な国際的日伊防共協調親善の会合は大分市として空前で最も有意義であった」(注58)と祝宴を記す。この時を詠んだ今村孝次の歌一首が「日の本のふることふみをイタリアの言葉にうつすうのはしの君」(注59)である。前掲の高山英明、今村孝次、三重野幸男の三者は、マレガの切支丹研究に積極的に協力していたことが「マレガ・プロジェクト」の研究成果によって解明されている。即ち「元大分市長高山英明については『正編(豊後切支丹史料正編)筆者加筆』の序文に謝辞があり(略)、マレガ氏に宛てたはがきが残され(略)、今村孝次氏からも、はがきで(略)何点かの読みの修正が伝えられている。大分で古書店を開いていた元新聞記者の三重野幸夫氏は、大分史談会の代表でもあった。(略)いくつかの史料に『三重野から得た』といったメモが見られる」(注60)。この後マレガは、1938(昭和13)年『古事記』イタリア語訳出版(プッリャ州・州都 Bari の Laterza 社。注61)し、さらに1942(昭和17)年『豊後切支丹史料』(別府サレジオ会)を刊行している。一方、第二次世界大戦(昭和14年9月)がはじまる4ヶ月前の昭和14年5月大分史談会の研究会が別府

市森平太郎宅にて開催され、研究家・今村孝次「堀家文書に就いて」に続き、大分カトリック教会司教マレガ博士「日本書紀と聖書」が発表されている^(注62)。マレガについて、佐藤はこう追想している。「マリオ・マレーガ博士という日本研究に熱心なカトリック神父がいた。何処で知り合ったか忘れてしまったか—もしかしたら大分の町で古本屋を開いていた三重野幸男という新聞記者あがりの人の店で会ったと思う。彼は大分史談という郷土研究誌を出していた。大分の教区は宮崎教区であったので初めは宮崎の神学校の教授として来たそうである。昭和10年前後のことで私はこの人からいろいろな事を学んだ。マレーガさんの国籍はイタリーであったので戦争の終わり頃まで日本で自由な生活ができた訳である。日本語をよく話しドイツ語、ラテン語、ギリシア語などの語学に通じ日本語で『豊後切支丹史料(上下2巻)』など書いている。又、上智大学で出していた『モニュメント・ジャポニカ』に寄稿していたし本国で『古事記』や『四十七士伝』なども出版している(略)』^(注63)。大分史談会やマレガ・プロジェクト等の報告によれば、佐藤の記憶は正鵠を得ている。以後マレガと佐藤との親交は深まり、マレガは遂に別府女子専門学校(昭和21年佐藤義詮創設)において、1949(昭和24)年からギリシア・ラテン語の講師を担当し、翌25年には新制大学設置条件を満たした別府女子大学において専門科目「言語学 ギリシア・ラテン」の講師を務めている^(注64)。

6. 佐藤の研究及び教育活動について—昭和実践女学校・豊州女学校・豊州高等女学校期—

下記には一部、佐藤が昭和実践女学校に関与する以前の業績もあるが、それを除けば、ほぼ上記私学3校経営に関わる時期に重なる活動と見做してよいものである。

- 1) 昭和9(1934)年7月1日 佐藤義詮『LYRA GRAECA 古希臘歌謡考』金洋堂書店
- 2) 昭和10年7月5日 佐藤義詮『豊前豊後書誌』金洋堂書店
- 3) 昭和11年9月2日 佐藤義詮『希臘古代詩序説』第三書院
- 4) 昭和12年4月28日:今村孝次[編・注]『松平親良夫人下国日記』編集・兼発行人 佐藤義詮 印刷所 高山活版社
印刷人 高山通男 発行所 昭和実践女学校

上記に加え、さらに昭和12年から13年にかけて、佐藤は精力的に『大分図書館』に書物及び県史について寄稿し続けている。ちなみに佐藤は既述の通り昭和11年10月5日に昭和実践女学校校長に就任している。以下、佐藤の研究を列記する。

- ①昭和12(1937)年8/20昭和女学校々主・佐藤義詮「書物について」^(注65)。②昭和12年12/20佐藤「大分県略史 序」^(注66)。③昭和13年1/20 佐藤「大分県略史(二) 古代(一)」正月巻頭文^(注67)。④昭和13年2/20 佐藤「大分県略史(三) 景行天皇の遺跡を中心として」^(注68)。⑤昭和13年3/20 佐藤「大分県略史(四) 風土記について」^(注69) (*①~⑤昭和実践女学校期)
- ⑥昭和13年4/20佐藤「大分県略史(5)」^(注70)。⑦昭和13年5/20佐藤「大分県略史(6) 続 寺社について」^(注71)。⑧昭和13年6/20に佐藤「大分県略史(7) 伝説について」^(注72)。⑨昭和13年7/20に佐藤「大分県略史(8) 再び伝説について」^(注73)。⑩昭和13年8/20佐藤「大分県略史(9) 延喜式に於ける調・庸」^(注74)。⑪昭和13年9/20佐藤「大分県略史(10) 豊後三姓に就いて」^(注75)。⑫昭和13年11/20佐藤「大分県略史(12) 大友小史(上)」^(注76)。⑬昭和13年12/20佐藤「大分県略史(13) 大友小史(中)」^(注77)。⑭昭和14年1/20佐藤「大分県略史(14) 大友小史(下の前)」^(注78)。

(*⑥~⑭豊州女学校期)

以上、上記①~⑤は昭和実践女学校期、⑥~⑭は豊州女学校期に発表されていることが分かる。なおより厳密に事実を確認するために、以下に昭和実践女学校・豊州女学校・豊州高等女学校期の関連年表を示す。年表の出典は『佐藤学園の八十年』による^(注79)。

- *昭和11年10月5日：佐藤義詮が昭和実践女学校設立者として認可され、校主となり、校長に今村孝次就任（昭和13年3月
末まで校長）。*ここまでは上記書籍1）～4）とほぼ対応。
- *昭和13年4月1日：再び豊州女学校と校名変更、校長・小野由之丞
*以下は豊州女学校・豊州高等女学校期との関係を示す。
- *昭和14年4月1日：豊州高等女学校と校名変更、大分市城崎町の新校舎に移転、校主・佐藤義詮、校長・小野由之丞
- *昭和17年4月20日：財団法人豊州高等女学校設立、理事長・佐藤義詮
- *昭和19年4月1日：（豊州高等女学校）校長・佐藤義詮／豊州高等女学校附属保育園「ヨイコの家」開設 園長・小野由
之丞
- *昭和21年5月1日：別府女学院を別府市鶴見園に開校
- *昭和22年3月31日：専門学校令により別府女子専門学校設置、併せて別府女学院生徒の編入学許可、校長・佐藤義詮
- *昭和23年5月26日：学制改革により豊州高等女学校を大分女子高等学校に編制替え認可、新校舎建築移転（大分市城崎5902
番地）
- *昭和25年3月14日：別府女子大学文学部設置、初代学長・佐藤義詮
- *昭和25年4月1日：大分女子高等学校を別府市北石垣に移転、男女共学の自由ヶ丘高等学校と校名変更
- *昭和26年2月27日：財団法人豊州高等女学校を学校法人佐藤学園に組織変更、初代理事長・佐藤義詮

以上が、佐藤学園成立以前の佐藤が「豊州女学校及び豊州高等女学校」に深く関与した事跡である。ここまで客観的証拠に基づく個々の多様な活動を通して、別府大学の源流について歴史的記述を試みてきた。即ち、豊州女学校廃校以降の歴史的変遷の事実を丁寧かつ厳格に検証すれば、豊州女学校創設者・小野由之丞の後継は、巖常圓、今村孝次、佐藤義詮という歴然たる系譜を辿り別府大学の源流をなすことが判明した。故に佐藤の指摘した豊州女学校跡石碑に関する歴史的事実と歴史的記述の相違は、史的には早晩修正されるべきものとする。

おわりに

既に述べた通り豊州女学校の校名は、廃校後一旦途切れるが、校地・校舎・生徒は、昭和女学院・昭和実践女学校へ継承された経緯があった。とは言え、その経営は厳しかった。そのような中でも関係者たちの弛まぬ努力と協力の賜として、豊州女学校の再生があった。再生の本流には、常に根本的に系統を一にする歴史的変遷が見られた。この変遷過程において、私立女学校経営に関与した小野・今村・佐藤、この三者の多様な活動を通じた地道で賢明な努力や協力が結実し、後継の別府大学の源流になったと言えよう。言うまでも無く、丁寧に過去の記録や証拠を発掘する努力を重ね、客観的に史的検証を深めれば、歴史的事実と歴史的記述の齟齬は解消される。よって豊州女学校の歴史的変遷の内容を厳格に検証し再評価することは極めて重要である。本稿における筆者の一連の実証的解明作業は、少なくとも明治から昭和初期にかけての大分県教育史上、とりわけ私学の担った役割や功績を正當に評価し意義付けることに寄与し得るものとする。かつて佐藤は、教育史上に私学の記録が少ないと言及していた。即ち「私立学校の本県に及ぼした公の記録が極めて少ないことである。教育史とは公立学校の歴史ではなく、県民に対する教育の歴史でなくてはならない」^(註80)。上記は、佐藤が「教育史における私学の果たした公的記録の不備」を指摘した至言であり、正に認識を刷新するに足る卓見と言えよう。本稿において筆者は、豊州女学校に関する佐藤の指摘を踏まえ、改めて旧史料に新史料をもって補強した上で、歴史的変遷を厳格に検証した。故に当然の結果、豊州女学校は、別府大学の源流をなすものであることを明白に再確認した。

- 注1 「私学の歴史」〔佐藤義詮『榎亭雑稿 ある回想』喜寿記念刊行会 非売品 p.210. 昭和51年3月15日 『大分合同新聞 灯』掲載〕
- 注2 碑銘は22行、1行最大17字・最低6字。「小野由之丞」ではなく「小野由之丞」を使用。現在、国土交通省の道路占用許可済証が貼付されているが、占用期間の年月日は手書き部分で消えて判読不能。国交省大分河川国道事務所（道路管理第一課保全対策官・高田洋彦）に確認したら、「国九整大占第29012101号」、占用期間「自 平成29年4月1日 至 平成34年3月31日」と判明した（2021年11月29日）。なお碑銘中の「小野順三」は、「大分市錦町2-2-16」に居住していた小野由之丞の親族（孫、故人）という証言を高山寧子（曾孫：現在占用許可申請者）から得ることができた（2022年2月1日）。上記住所は、現在道路拡幅工事によって家屋ともに消えている。
- 注3 次の史料では昭和13年。佐藤学園八十年記念誌編集委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』昭和62（1987）p.60。以下、この史料を『佐藤学園の八十年』と略す。
- 注4 社会教育は社会教育の誤記か。この時代、通俗教育と呼ぶものが、一般大衆を対象とする平易な教育を意味し、大正後期まで「社会教育」の代りに用いられた。以上下記「コトバンク」を参照。
<https://kotobank.jp/word/%E9%80%9A%E4%BF%97%E6%95%99%E8%82%B2-98979>
- 注5 編集兼発行人 小俣愨『大分人名辞書』大正6（1917）、p.118。同書「上梓之辞」の中で小俣愨は、小野由之丞他数名の任侠的な援助を得たことを記している。なお、豊州女学校校舎の写真が同書118頁に掲載されている。『佐藤学園の八十年』によれば、小野由之丞は、明治6年10月8日生、昭和25年3月21日77歳没と記す（同書p.32.）。ちなみに、昭和25年3月14日付で認可された別府女子大学の理事でもあったことが分かる（同書p.99.）。
- 注6 『大分県教育雑誌 第277号 彙報』大分県教育会 明治41年3月31日 p.52. 以下、『大分県教育雑誌』を『教育雑誌』と略す。ちなみに明治41年の1円は、令和3年の1109円に相当する。計算方法は、下記URL掲載の「日本銀行計算式」を参照し換算した。
<https://www.boj.or.jp/announcements/education/oshiete/history/j12.htm/>
- 注7 『教育雑誌 第277号 大分便り』明治41年3月31日 p.62.
- 注8 『教育雑誌 第278号 大分便り』明治41年4月30日 p.43.
- 注9 『教育雑誌 第279号 大分便り』明治41年5月31日 p.19.
- 注10 『佐藤学園の八十年』p.28.
- 注11 『大分市教育史』大分市・大分市教育会 非売品 昭和4年 p.814. また「教育年表」にも「於北町」に豊州女学校を創設したと記す（同書p.994.）。
- 注12 『教育雑誌 第284号 大分便り』（明治41年10月31日）以下原文「私立豊州女学校にては生徒増加の爲め教室狭隘を感じ新一学級を編み東京哲学館卒業生末廣伸吉氏を聘し文学科を擔任せしめ更に来る十一月一日よりは尋常小学校准教員検定試験準備のため十二月一日よりは高等女学校女子師範学校入学試験準備の爲め毎日午後三時より五時まで必要学科の講習をなす由別項広告の通りに御座候」（同書p.59.）。
- 注13 日本銀行計算式（注6参照）を基に換算すれば、明治41年の50銭は令和3年の554円に相当する。
- 注14 『教育雑誌 第284号』明治41年10月31日 当該紙面は、頁番号なし、ピンク紙に印刷している。
- 注15 『教育雑誌 第309号 大分便り』明治43年11月30日 p.68. この記述は『佐藤学園の八十年』にも見える（同書pp.28-29.）。
- 注16 『教育雑誌 第321号 彙報』明治44年11月1日 p.48.
- 注17 見出し記事「新学期近づく 子弟を何処へ（五）・・・豊州女学校」：『大分新聞』（大正7年3月6日 朝刊 7頁）大分県立図書館大分合同新聞記事見出し検索により閲覧。
- 注18 『大分県教育五十年史』大分県教育会 大正13（1924）年 pp.465-466. 一部誤記あり。「金池新築校舎」は、正しくは「明治44年9月7日落成」（『佐藤学園の八十年』p.30.）注11史料も明治44年開校と記す。
- 注19 通俗教育とは、大正後期まで「社会教育」の代りに用いられた。語義について以下のURLを参照した。
『ブリタニカ国際大百科事典 小項目辞典』：
<https://kotobank.jp/word/%E9%80%9A%E4%BF%97%E6%95%99%E8%82%B2-9897>
- 注20 『教育雑誌 第344号 会報』大正2年10月1日 p.2. 小野吉之丞と表記されるが由之丞の誤記。
- 注21 注20と同じ

- 注22 『大分県教育会史』（財団法人大分県教育団体維持財団 昭和44年）p. 23. なお、総会は県会議事堂で開催。
- 注23 『大分市教育史』 pp. 909-912. 大正7年同9年同13年代議員名に小野由之丞、高山英明が同時にある。
- 注24 『大分市教育史』 pp. 952-953.
- 注25 『大分市教育史』 p. 936.
- 注26 『教育雑誌 第415号 会報』 p. 39.
- 注27 『大分市教育史』 p. 943. 調査委員の中に小野由之丞、一丸伍兵衛、高山英明、平松折次。また起草委員の中に小野由之丞と平松折次（大正13年私立大分中等夜間学校創設）が見える。ちなみに高山は、高山右近子孫で元大分市長（官選旧大分市長第4代）を務めたことがあり、後述のマレガ博士との親交が深く、又一方一丸伍兵衛は、昭和12年にマレガ著（伊訳）『古事記』出版記念宴会を開催した場所「一丸デパート」の社長である。
- 注28 「本会年次46 代議員会2月5日79名出席 規則改正により理事5名とし左記の通り決定 越川弥栄氏、小野由之丞と補欠新任浦長胤氏、矢野孝吉氏、平松折次氏 会長川島伝三郎決定」[『大分県教育会史年表』財団法人大分県教育団体維持財団 昭和44年 p. 35.]
- 注29 ちなみに福沢記念図書館は、県立図書館の前身。明治37年10月29日開館。この年日露戦争開始。『公文書館だより 第10号』（大分県公文書館 平成15年 2月28日）下記 URL 参照。
<https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/11729.PDF>
講演記事については『教育雑誌 第415号 会報』（大正9年1月1日 p. 41.）参照。
- 注30 『大分市教育史 第17章 第10節 過去の私立学校 九 豊州女学校』p. 814. 注11参照。
- 注31 「発刊の辞 同窓会理事長 小野由之丞」と記す。『創立五十年記念誌』（小野由之丞発行兼編輯 大分県師範学校同窓会 昭和2年7月30日発行 p. 1.）また『大分県師範学校 開校六十周年記念誌』（発行兼編輯人・安東玉彦 大分県師範学校 昭和12年3月27日発行 pp. 31-32.）にも大分県師範学校同窓会理事長・小野由之丞の祝辞が掲載されている。
- 注32 右書中の「別府女子専門学校の誕生」は、経済的理由で廃校となったことを記す [『別府大学の三十年』（佐藤学園・別府大学 昭和53年 p. 2.）]。
- 注33 『佐藤学園の八十年』 p. 38.
- 注34 『大分市教育史』 p. 803. 人名辞書（大正6年）によれば巖常圓は、次の通り真宗僧侶兼教育者であることがわかる。「〔北海道郡津組村在朝鮮〕真宗本派の巨刹津久見西教寺前住職巖慶哉の長男、明治7年生。本願寺文学寮、佛教大学、京都同志社に学び、（明治）37年以来朝鮮に留錫、幾度に日語学校を開き、京城に大聖教会を設け、如今京城監獄に教誨師となり、傍ら本願寺留学生語学教授を嘱託さる」（小俣愨『大分県人名辞書』p. 45.）。
- 注35 前掲『佐藤学園の八十年』p. 45.
- 注36 『大分市教育史 第17章 第8節 私立昭和女学院』pp. 803.-806.
- 注37 前掲『佐藤学園の八十年・年表』p. 606.
- 注38 『同書・年表』p. 606. なお『大分市新地図』（大分情報局 昭和10年）において、大智寺の南方、東新町通西側に面して「昭和实践女学校」名が確認される。
- 注39 『同書・年表』p. 606.
- 注40 『同書』pp. 13-14.
- 注41 『同書・年表』p. 606. なお、女学校から高等女学校へ変更の経緯は以下の通りである。「高等女学校の認可をとるためには厳しい基準があり、県に申請し、文部省に積極的に働きかけをした。同時に県庁の東側に用地をもとめ、顕徳寺の校舎を一部移し、ここに新校舎を新築、新しいスタートをした」（同書 p. 60.）豊州女学校を掲載した次の地図がある。東京交通社発行『大分市地図』（著作兼発行印刷人 西村善汎 昭和15年12月10日発行）において、当時府内城（中に県庁所在）の内濠東に接する二條通北側に豊州女学校の所在が確認され、地図の一部に「城崎町 豊州女学校 電話0091番」の案内表記もある。
- 注42 ①昭和5（1930）年記事「本会年次46 代議員会2月5日79名出席 規則改正により理事5名とし左記の通り決定 越川弥栄氏、小野由之丞と補欠新任浦長胤氏、矢野孝吉氏、平松折次氏 会長川島伝三郎決定」（『大分県教育会史 年表』p. 35.）
②昭和7（1932）年記事「本会年次48 教育会館建設敷地委員会（3月28日の評議委員会で会館建設の細則を決めた）専務理事 浦長胤氏、理事 小野由之丞氏、小原恵三氏、平松折次氏、矢野孝吉氏、専務幹事 福田潤氏。（『大分県教育会史 年表』p. 37.）

- ③昭和7(1932)年記事「本会年次48 ○会館建設常任委員会 9月3日 出席者 会長 堀五之介・理事 小野由之丞、小原恵三、矢野孝吉、委員 河野琢磨、佐藤丈平、池上弘、牧千葉三、加崎為五郎、辻英俊、花田虎介の諸氏と福田潤専務幹事。石丸技師」(『大分県教育会史 年表』p.38.)
- ④昭和8(1933)年記事「本会年次49 ○教育会館起工式 1月19日現地。10月30日竣工。代議員会2月14・15日 大正記念館 93名出席 役員選挙 会長 堀五之介氏 理事向井新(新任) 小野由之丞氏、小原恵三氏重任 ○寄付募集 5月 小野由之丞、松本鍬三郎氏第二次募集のため上京・上阪。
○全国連合会 5月 小野由之丞、福田潤、渡辺五郎の三氏出席 ・帝国教育会創立五十周年記念式並に全国教育大会 11月9・10日 本会から松本鍬三郎、梅高晋行、古井六彦三氏出席。この会で教育功労者760名表彰あり、その中に本県人左(ママ)の通り。山本市次郎、松本鍬三郎、河上貫一、小野京市、森清克、梅高晋行、矢野孝吉、小野由之丞、小野拡、古井六彦、幸フク、原田助市、成清信愛の十三名。
◎大分県教育会館落成式 11月5日 大分市大字大分荷揚町の51番地(『大分県教育会史 年表』pp.38-39.)
- ⑤昭和33(1958)年記事「本会年次74 ○会館建設25周年 大分県教育会館建設25周年記念式を挙行した。11月20日 行事 一、式典 一、会館建設並に維持功労物故者慰霊祭 一、会館建設 並に維持 功労者表彰 一、懐旧談 一、祝賀会 一、記念誌発刊 一、遺墨展 物故者 宇都宮喜六氏、小野由之丞氏、小原恵三、松本鍬三郎、矢野孝吉、外4名あり。感謝状贈呈者 福田潤氏、平松次氏、辻英俊外13名」(『大分県教育会史 年表』p.54.)

注43 注31と同じ。

注44 ①豊後岡藩 唐橋世濟 纂輯 伊藤猛 田能村孝憲 古田匡方 校正『豊後国志 附 箋 豊後風土記』[発行者 大分市 今村孝次 東京 新島彰男/大分二豊文献刊行会 東京 朋文堂書店発行 昭和6(1931)年5月15日]。なお、奥書に「二豊文献刊行会 大分市東新町3208番地 今村孝次」と記す。

注45 ②佐藤義詮『豊前豊後書誌』金洋堂書店(大分市大分橋通) 昭和10年7月5日。冒頭に今村孝次「贋碑偽書いかさま古文書の話 一序文に代へて一 珠江叟(号:珠江=今村孝次)を pp.1-14.に収録。同文は『二豊人文志』(朋文堂 昭和18年11月5日発行)にも収録。

注46 ③a『大分図書館 第53号』(大分県立図書館 昭和12年1月20日 p.1.)において、今村孝次「石川康長と『東海美女伝』の主人公大久保長安」を新年巻頭文として掲載。なお、以下『大分図書館』を『大図』と略す)／③b『大図 第54号』(昭和12年2月20日 pp.1-2.)において、今村孝次「石川康長と『東海美女伝』の主人公大久保長安(つづき)」を掲載。

注47 ④『大図 第54号』(昭和12年2月20日 p.4.)において、「大分史談会々報 月例会 17日 日曜日」記事に昭和実践女学校長・今村孝次氏「明治初期に於ける大分県出身の文士」と見える。

注48 ⑤今村孝次[編・注]『松平親良夫人下国日記』編集・兼発行人 佐藤義詮 印刷所 高山活版社 印刷人 高山通男 発行所 昭和実践女学校 昭和12年4月28日発行(国立国会図書館オンライン公共図書館蔵書国会図書館デジタルコレクション)。以下、書中に次の通りの文章を記す。

「佐藤義詮君此頃書肆ハレルヤより一古書を購入。表題の如き表書ありて表紙共十一枚の小冊子なり。一見するに筆蹟も見事にて、文久三年三月十三日、江戸の杵築松平家藩邸を發し、東海道より伊勢路大和路を経て大阪より船に乗り、四月廿日杵築城に着くまでの紀行文なり。(略)。女流文学の伝ふべき者に乏しき大分県にありては擬古文の珍しき一資料と謂ふべし。(略)。本校生徒の課外読本にもと思ひて茲に謄写付印する事なしたり。但し原文は多く仮名書きにて読下するに不便なれば、適宜に漢字に書改め、又語格仮名遣の明かに誤れりと認めらるゝは之を正し、送仮名も今の用法によりて改めたる所あり(略)。」序文に「昭和12年3月17日昭和実践女学校にて 今村孝次識す」とあり。(『松平親良夫人下国日記』p.1.)。

注49 昭和8(1933)年11月3日講演会 高山英明「大友宗麟と和蘭貿易に就いて」・今村孝次「田能村竹田の生涯における一転機」(「県立図書館のできごと」『大分県立図書館百年史』大分県立図書館 p.28.)。なお、今村論文は「竹田の生涯に於ける一転機」と題して、以下の書に収録。今村孝次『二豊人文志』朋文堂 昭和18年11月5日。序 村上直次郎 後記 佐藤義詮。書中に「佐藤義詮・高山慶三氏等相議つて君の遺稿を編集し、詩文と合せ一巻の書となして世に公にせらるゝに至った」(同書序 p.2.)と記し、同書後記(p.372.)に今村孝次(明治8年7月20日～昭和16年1月3日 享年65歳)とある。

注50 『大図 第27号』(昭和9年10月20日)の図書館週間の記事に日本図書館協会主催、文部省後援による「郷土精神文化史講座開設」の予告が出ている。その講師担当、今村孝次「◎国学 二豊国学の概観」がある

- (前掲『二豊人文志』に収録)。「図書館週間」(『大図 第27号』p.1.)によれば、講師は外にも4名おり、その中に久多羅木儀一郎「◎漢学 二豊漢学の概観」、マリアーガ「◎切利支丹 大友氏と切利支丹」が見える。ちなみに『大図 第28号』(昭和9年11月20日 p.1.)掲載「図書館週間概況」の記事には、久多羅木儀一郎(講演日11月3日)、マレガ(講演日11月3日、マレガは、マリオ・マレガのこと)と見え、マリアーガと同一人物と判明する。なお今村孝次は、講演日は11月4日と見える(『大図 第28号』p.1.)。
- 注51 大分史談会の会務報告の中に、昭和11年10月18日三重野幸男が発起、大分県立図書館司書長長峯崇仁援助の下に高山英明、今村孝次、十時英司の賛成を得て創立したことが明記されている(『大分史談 第壹輯』昭和12年12月5日 p.37.)。第2回研究会(昭和11年11月15日 於大分図書館)来会者に高山英明、今村孝次、小野由之亟(筆者加筆：昭和13年4月1日豊州女学校校長へ)、佐藤義詮、長峯崇仁、三重野幸男などが見える(『大分史談 第壹輯』p.37.)。
- 注52 佐藤晃洋「マレガ・プロジェクトに係る平成25年度概要調査」(『史料館研究紀要 第19号』大分県立先哲史料館 2015年 p.35.)
- 注53 「第一部 マリオ・マレガ資料の概要」[編集 大友一雄・三野行徳『バチカン図書館所蔵 マリオ・マレガ資料—概説と紹介—』マレガプロジェクト(国文学研究資料館)2021年 p.4.]
- 注54 編集兼発行者 三重野幸夫 大分史談会『大分史談 第壹輯』(印刷所・高山通男 印刷所・高山活版社 昭和12年12月5日)同書「第9回は同年7月11日柞原八幡宮にて記念写真を撮る」と記す(p.38.)。
- 注55 『大分史談 第壹輯』pp.2-9。第4回大分史談会は、昭和12年1月17日、大分図書館にて開会し「黎明期の明治文学と郷土出身の名士」について、大分昭和実践女学校長(会員)今村孝次の講演があったことを記す(『大分史談 第壹輯』p.37.)。
- 注56 『大分史談 第壹輯』pp.18-21。
- 注57 『大分史談 第壹輯』pp.22-23。
- 注58 『大分史談 第二輯』(昭和13年3月10日)pp.49-50。
- 注59 『大分史談 第二輯 文苑』p.52。
- 注60 松井洋子・佐藤孝之・松澤克行『甦る“豊後切支丹史料”バチカン図書館所蔵マレガ氏収集文書より』勉誠出版 2020年 p.27.)。ちなみに松井洋子は、「紙片のメモ類から高橋真吉、高山英明、今村孝次など、他にも何人もの人物が、史料や情報の提供、翻刻の校訂、原稿の校閲等に協力していたこと」を推測している[「第1部 マリオ・マレガ資料の概要 A1」(前掲『バチカン図書館所蔵 マリオ・マレガ資料—概要と紹介—』マレガ・プロジェクト(国文学研究資料館)p.8.)]
- 注61 シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」(『国文学研究資料館紀要 第12号 2016-03-14』)国文学研究資料館学術情報リポジトリ・下記URL 閲覧。https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1862&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- 注62 『大分史談 第三輯』(昭和14年11月15日)。なお発表は、昭和14年5月6日(同書)pp.36-37。
- 注63 佐藤義詮「マレガ博士のこと」(『アルゴノート No.10 別府大学図書館報』1983年11月1日 p.2.)
- 注64 前掲『佐藤学園の八十年』p.92. p.106。
- 注65 『大図 第59号』(昭和12年8月20日)p.2。
- 注66 『大図 第63号』(昭和12年12月20日)p.2。
- 注67 『大図 第64号』(昭和13年1月20日)pp.1-2。
- 注68 『大図 第65号』(昭和13年2月20日)pp.1-2。なお同書(p.2.)に昭和女学校図書部調査の記事として「欧米にて出版されたる最近の日本関係書目に就て」の図書一覧がある。
- 注69 『大図 第66号』(昭和13年3月20日)p.2。なお同書(p.2.)に昭和女学校図書部調査の記事として「欧米にて出版されたる最近の日本関係書目(二)」の図書一覧がある。
- 注70 『大図 第67号』(昭和13年4月20日)pp.1-2。
- 注71 『大図 第68号』(昭和13年5月20日)pp.1-2。
- 注72 『大図 第69号』(昭和13年6月20日)pp.1-2。ちなみに同書(p.4.)に、田中秀央・落合太郎『ギリシア・ラテン引用語辞典』(岩波書店 昭和12年)を大分図書館が架蔵したことが見える。佐藤の杏極亭蔵書は、昭和17年版である。恐らく大分図書館と関わりの深かった佐藤が、後に建学の精神に掲げる「VERITAS LIBERAT」の語義に関心を寄せ、昭和12年版を閲覧した可能性が高い。
- 注73 『大図 第70号』(昭和13年7月20日)pp.1-2。

注74 『大図 第71号』（昭和13年8月20日）pp. 1-2.

注75 『大図 第72号』（昭和13年9月20日）pp. 1-2.

注76 『大図 第74号』（昭和13年11月20日）pp. 1-2. ちなみに昭和13年10/20『大図 第73号』は欠号となっていることを担当司書との間で確認済み。

注77 『大図 第75号』（昭和13年12月20日）p. 2.

注78 『大図 第76号』（昭和14年1月20日）p. 2. 紙面印字は昭和13年1月20日とあるが、前後関係の流れから判断すれば、昭和13年ではなく14年とすべきである。

注79 前掲『佐藤学園の八十年・年表』p. 606.

注80 注1と同じ。

図版出典

図1-①・図1-②：豊州女学校跡地石碑：筆者撮影（2021年9月30日）

図2：豊州女学校（上野町）『大分新地図』（甲斐書店 地理研究会 大正10年 2月15日）